

原子力空母の横須賀入港（九月二五日前後か）を許すな！

木元茂夫

原子力空母ジョージ・ワシントンは日本時間八月二二日の未明、アメリカ西海岸のサンディエゴ基地を出港した。ネイビーニュースは「空母GWは約五五〇〇名の水兵とともに、合衆国の唯一の恒久的な前進配備の空母として空母キティホークと交替するために、日本の横須賀への旅をはじめた」と報じた。

米海軍はGWが五月二二日に南米沖で起こした船内火災について、二ヶ月以上もたつてから、原因は「禁煙区域での喫煙」と発表した。「可燃性の液体や隣の区画に規則に反して蓄えられていた可燃性物質に引火した」、「とりわけ九〇ガロン（約三二四リットル）あまりの冷凍機オイルが火勢を拡大することになった」と説明する。しかし、揮発性の低い冷凍機オイルが船内八〇区画にも燃え広がらせた原因だとは到底思えない。アメリカ海軍はまだ真相を隠している、と考えるほうが自然だろう。

米海軍は、艦長、副艦長を解任し、火災についてはケリが付いたことにしたかったようだ。七月三一日に横須賀市を訪れた外務省北米課長の西宮伸一は、米政府の意を体して、「米海軍は、艦長と副艦長を同時に解任するという大変厳しい処分を行なった。これは日本国民及び横須賀市民に対して、規律の一層の強化、再発防止の徹底について米側の決意を示すものでもあると受け止めている」と説明をした。しかし、事態はそれほど甘くなかった。

八月一九日にサンディエゴ軍港を訪れたギャリー・ラフヘッド海軍作戦部長は、「いま、君達はまさに合衆国海軍の大使であり、合衆国の大使である」と乗組員を激励したが、この日、GWの乗組員である二人の二等兵曹が殺人容疑で地元警察に逮捕されたことが明らかになった。一九日発の共同電として「神奈川新聞」が報道したところによれば、八月一六日、サンディエゴ市内の飲食店で別の二人組みの客と口論になり、二等兵曹の一人が発砲、相手を死亡させたというものである。艦長と副艦長を解任して

から、わずか二週間あまりで起きた事件である。

アフガニスタンとイラクで長引く戦争は、空母の乗組員のストレスを拡大させずにはおかない。原子力空母は、ディーゼルエンジンから原子炉にすることによって空いたスペースを、艦載機の燃料と爆弾・ミサイルの増量のために使われた。原子力空母はキティホークの二・六倍、九〇〇トンの航空機燃料を搭載している。そのため、兵士は三段ベッドの生活を強いられている。自衛隊だって最近の艦船は二段ベッドだというのである。閉鎖空間の中での長期勤務はそれ自身が耐え難いものである。これまで、こうした問題が表面にあまり出なかったのは長期にわたる戦争がなく、空母の運用にも余裕があったらからであろう。

そして、もう一つの米海軍の不祥事、原子力潜水艦ヒューストンが約二年間放射性物質を漏らし続けていた問題である。沖縄県うるま市は八月一八日「今回の寄港により復帰後三〇五回、今年になって二七回の寄港となっており、最多の寄港となった昨年の二四回を上回り、寄港頻度が突出して増えている状況は異常な状態と言わざるをえない」とし、一、ハワイトビーチへ米原子力軍艦を寄港させないこと。二、米原子力潜水艦の寄港については明確な説明責任を果たすこと。三、日米地位協定の抜本的改定を行なうこと、とする抗議決議を採択した。佐世保市も二日、「本市議会としても、原子力艦船の安全性、監視体制、防災体制の確立がなされないままの原子力艦船の入港を安易に認めるものではありません」との意見書を採択した。横須賀市だけが、市民安全課の職員が「漏れていない可能性もある」と市民に説明して、怒りを買っている。市民の側に立って、はつきり国と米軍に意思表示をしなければ市民の安全は守れない。原子力空母の配備が迫る中、その声を広げて行きたい。

（きもと・しげお／派兵チェック編集委員会）